神医と呼ばれた男（中身アホ気味転生者）

アルマリ

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
曰く、シンザンが彼が固辞する神の称号を受け取る訳にはいかないと言い放つと、報道関係の全てが前言を撤回する発表をした
曰く、彼は皇帝の理想に必要不可欠な存在

曰く、彼が執刀する時点で死んでいなければ全ての患者は健常にまで必ず回復する

（やべぇよ、俺ってば残高１２桁いったんだけど。　完全に辞め時見失ったわ）

曰く、彼は神から遣わされた使徒だと

目　次

神医と呼ばれた男（中身アホ気味転生者）―― 1
激震（８ヶ月ぶり３５回目）―― 4
祝福を汚すな（ガチギレ医師の抗議電話）―― 7
生徒会長の楽しみ（仲良く紅茶を飲むだけ）―― 13
勝利者（無敗９冠ワールドレコード持ち）―― 18
外堀―― 22

神医と呼ばれた男（中身アホ気味転生者）

今日も慌ただしく怪我人が運ばれて来る。
今回は２人。医師は二十年の月日で磨かれた眼で即座に明らかな重体患者を手術室に運ぶように指示する。
だが今回は滅多に起こらない事が起きた。

「お嬢様を先に治せ！　お嬢様は将来を期待されるお方なのだ。　凡俗は後回しにしろ！」

明らかに脳にまでダメージがありそうなウマ娘を後回しにし、腕と脚の通常骨折のウマ娘を先にと叫ぶ男。

「タキオン、任せた」
「はいはい」

それを完全に無視して手術室に向かう医師と尚も叫ぶ男との間、そこに医師を庇うようにタキオンと呼ばれたウマ娘が雑に男を押しながら返事をする。

「戻れ貴様ァ！　この方は」

直後に打撃音
脇腹にウマ娘基準の軽い蹴りが突き刺さる

「まだこんなのが居るんだねえ、名家だの富豪だのが楯突いていい人ではないのだが……まあ私の知った事ではないか」

悶絶する男を引きずりながら軽快に歩く彼女の名はアグネスタキオン。
趣味と称してウマ娘の研究の為のラボを病院に用意してもらう代

わりとして、今引きずっている男のような邪魔者の排除を請け負っている。
本来は暴れるウマ娘の手足を抑え込む役割なのだが契約に邪魔者の排除も含まれているので嫌嫌だがやるしかないのだ。
(先生への恩返しだと思えば苦はないね、本来のプランはもう証明済み……後は寿引退でもしようか)

史上最速と謳われる今も現役で無敗を貫くＧ１九冠ウマ娘。
皇帝すら切って捨てた最速、超光速のプリンセスことアグネスタキオンは男を病院の外に投げ捨てながら笑う。

「タキオンさん、お疲れ様。　どうしたの？アレ」

「ああ先生を脅して重症患者を放置しろと喚いたバカさ、後で抗議をすることになるだろうね。　いつものアレでね」

「じゃあ仕方ないね、また名家だか富豪だかが潰れそうね～　名家がみんなメジロ家みたいだったらいいのに」

「本当の名家は喚かないのさ、当主が直々に頭を下げに此処に赴くのが正しい。本来はね」

「あぁ～そういえば迷惑にならないように使用人も連れて来ないものねぇ、護衛も病院内に連れて来ない……名家も色々居るのねぇ」

「どちらが人として正しいのかは瞭然だね、では私も戻るよ。　アレは警備に引き渡してくれ」

「了解、っと……１０冠目楽しみにしてるよ！」

受付のオバちゃんと仲よさげに会話し、男の引き渡しを頼み背に激励を受ける。
ヒラヒラと後手に手というか袖を振りながら歩く彼女は傍目から見れば少し不真面目な雰囲気の少女。

だが彼女は《弱点を完全克服したアグネスタキオン》だ。

脚の強度は一般ウマ娘並みなので一度試合後に折れていたりしたが、骨折程度なら即日退院できる病院が存在しているので療養の必要が無い。

（レースで怖いのは皇帝様とテイオー君かな……色々な意味で怖いのはライスシャワー君とか……多くないかな？）

強敵を頭に浮かべながら手術室近くの控室へと歩いて戻るタキオン、戻る頃には手術は終わっているだろうと笑いながら歩く。

激震（８ヶ月ぶり３５回目）

日本国を激震が襲う

即刻潰れた名家の執事の男の発言を聞きつけて各国が尋常ではない速度で日本を批判し始め、遠回しに自分の国においでと医師に手紙が届く。

（まだ2日しか経ってないんですけど……カエル医師の才能は貰いすぎだったか？……でもウマ娘世界に行くならウマ娘の活躍見たかったしなぁ、完全体タキオンとか諸々の悲劇の防止とか）

面の皮が厚い男は感情を表情に出さず、手紙をゴミ箱にシュートしながら溜息を吐くだけに見える。

「設備だけならアメリカだろうね、だけど私はマレーシアとかが好きかな……ナイジェリアは妥協案だね」

「タキオン、お前は来月末にレースがあるだろう。　わざわざ早朝にトレーニングを済ませてまで手伝わなくても良いのだぞ？」

（まぁ言うて美少女が居なくていいかと言われれば否!!なんだが、朝から練習キツくない？）

「私の提案は無視かい？　私は先生と先生の病院が好きなのさ……居心地がいいしね」

何故か発言の後に数秒固まり、少し顔を俯かせながら居心地がいいと言うタキオンに医師は笑う。

「お前のような健康優良児が居心地の良い病院とは変な話だがな、そ

れと外国に移住の予定は無いよ」
（日本に居ないとウマ娘達の活躍が見られないジャマイカ!!外国のレースって馴染み無いしなぁ、繋靭帯炎と屈腱炎は薬作ったし普通の医師でも治せるからヨシッ！）

穏やかに笑う内心では大暴れしているがコレがこの男の日常である。

「気づいてない？せっかく言えたのに朴念仁めそれならいい加減コレはやめた方がいいんじゃないかい？」

何かボソッと呟いた後に呆れた様子で手渡されたのは潰れた名家から回収された３５枚目の抗議文。

【これが受け入れられない場合、私は医師を辞め表舞台から消える事を約束する】

３５回を経験してもタキオンの背に嫌な汗がつたう程の激烈な脅し文句、１回目など国のトップである天皇陛下と総理大臣が揃って病院に来て説得しに来た程の大惨事になった。

それでも彼はこの一文を必ず抗議文に入れる、何故なら

「ははは、それだけの覚悟を見せないとダメだろう？　俺は患者に必要なモノは全て揃える、絶対に権力に屈さない環境も俺の病院には必要なモノだ」

偉そうな事を言っている男、これも紛れも無く本心ではあるのだが

（ワンチャンいけるかもしれない！　俺は諦めなければ辞められると信じているのだ!!　嫁を見つけてイチャイチャしながらウマ娘の

レースを見るんだ！……もう３７歳なんだよぅ許しておくれよぅ辞めさせてぇ）

こちらが本音中の本音である。

この男は気づいていないが、内心を正直に話せば２桁の嫁が即日重婚可能なナイジェリア辺りに行って男と自分達の国籍と婚姻届をもぎ取って来るだろう。

１回目の抗議文の時点でウマ娘の不治の病に近い繋靭帯炎と屈腱炎を完治させる方法をタダで世界にバラ撒いている。

この男を受け入れない国はないのだから十分可能だろう。

（思えば前世は魔法使いになる前に死んだから期待してたんだよなぁ～！　何もなかったけど!!　息子が元気なうちに結婚させてくれぇ！）

この拗らせた男は気づいていない。

祝福を汚すな（ガチギレ医師の抗議電話）

医師の抗議には文だけではなく電話も存在する。

時は遡りライスシャワーがミホノブルボンの三冠を阻止した時まで戻る。

『国民の見ている放送で大人が寄ってたかって高校生の年齢の子供に心的外傷後のストレス障害になる可能性すらある罵倒とウマ娘の花舞台でのブーイング……医者に喧嘩を売りたいなら買ってやろう、年末に提供予定の最新薬や最新医療機器の特許を他国に渡す。　もちろん俺も売国奴となるので医師は辞め、賠償金を払い資産は寄付して国外で一生を過ごす』

「謝罪!!　申し訳ございませんでした!!どうか挽回の機会をいただきたい!!!」

ヘドバンしそうな勢いで謝る理事長、いきなり掛かってきた電話は医療関係では全ての国で最新鋭を誇る日本の危機を告げる静かな怒りだった。

『む、理事長ですか？　ＵＲＡに繋げた筈……生徒の事だからと学園に繋げた？　今度は直通の電話番号を聞き出さないとな……オホン！　申し訳無いが理事長がＵＲＡにお伝えいただきたい』

「了解！　一言一句間違い無く伝えます！」

『ごめんね、やよいちゃん……では今すぐライブをやり直していただ

きたい、費用は俺が持ちます。ブーイングを行った愚か者共を下げて、肩身の狭い思いをしていた純粋なレースとライブのファンを前に出して欲しい。ライスシャワー君は2番人気だった筈、ファンが来ていない筈がない』

やよいの後ろでたづなが鬼気迫る勢いで言葉を文書化している。受話器から離れているが耳が良いようだ。

『多くは求めません、勝者に歓声を敗者にも歓声を。レースもライブも通常通りに戻していただければ満足です。その後の報道に関しては俺の名前を存分に使い、ルナ……シンボリルドルフが納得する内容以外の報道はＵＲＡで注意勧告を出して下さるなら前言の一切を撤回します。』

「承知！　恐らく全て通るだろう！通してみせます！」

『ルナの所とココは伝えないでね、やよいちゃんとたづなちゃんを疑ってはいないし申し訳ないと思ってる。苦労はあるだろうけど君達の志は正しいと俺は信じている、出来れば俺や他の医師の世話にならない程度に頑張って欲しい……そろそろライスシャワー君に電話するから切るけど、医療関係なら遠慮なく俺に全てを投げていいからね』

「かっ、感謝！ぁありがとうございます！」

涙声だが礼を言うやよいを温かい目で見守るたづな、そして独特の音と共に通話が切れる。

ここで終わればいい話で済んだのであろうが、やよいとたづなは恐らく数時間はノンストップでＵＲＡや関係各署に電話をかけ続ける苦行が待っている。

だが自らの学園のウマ娘の為ならば苦はないと涙を拭い電話に向かう。

その後ろでスマホを４台スピーカーモードにしながら受話器を使い、同時に５人に連絡をとっているたづなの姿があった。

芙蓉ステークスの後に判明した骨折、それを今日退院できるけど明日までは泊まっていきなさいと言われた際の事。

保護者説明の際に出走手続への名前貸しのトレーナーしかいないと言ってしまい、ならばと先生のプライベートナンバーを交換した。

トレーナーではないが医師だからトレーニングやレース後に不調があれば連絡しなさい遠慮はしない事と、気軽に電話できないが急患が無い限り大丈夫な時間を教えてもらった。

何度か電話したがいつも嬉しそうに答えてくれるお医者さん

どうしてこんな時に、と思った

「もしもし」

『ライスシャワー君かい？君が大変な時に申し訳ない、でも関係がある事なんだ』

「関係？ライスなんかと？」

『……ああ、ウィニングライブは終わっていない』

「終わったよ……ライスはもう」

『終わってないさ、君が笑顔にならないと終わらないんだ。』

遮るように何度も終わっていないと繰り返す。

『心無い言葉に傷ついた君に無茶を言う俺を恨んでくれていい、君に少しでも勇気が残っているなら来た道をゆっくりでいいから引き返してもらいたい』

ライスは本当に先生を恨みたくなった。

あの場所に、戻れと言われたのだ。

あの場所は2色なのに、自分はいない方がいいのに

でも怖くて声が出ない

『君に怪我が無くて良かった』

医師らしい言葉

『君はヒールではない』

『君が一着になって良かった』

『俺は君の走りがカッコいいと思う』

『君の応援をして良かった』

一つ一つ肯定の言葉を心から言うように、ゆっくりと語りかける。

勇気を振り絞る。

『さあ行きなさい、君の名前の通り祝福が待っている』

信じてみたいと、思った

「ライスさん」

「ブルボンさん？」

『後は君達の時間だ。精一杯楽しんでくるといい』

見渡す限りの青い光

「信じて良かった……お兄様」

ライスシャワーは祝福を改めて受け取る。

約束通り、最後は笑顔で

生徒会長の楽しみ（仲良く紅茶を飲むだけ）

かの天才という称号を鼻で笑うレベルの才能と努力と信念の人であるカエル医師と違う部分が男にはある。

男には後ろ盾が乏しかった。

故に男はアメリカで飛び級に飛び級を重ねて医師の資格を取り、ロシアで臨床研修で数年滞在し、再度アメリカで数年生活してから日本に帰って来ている。

日本に帰って来た時点でちょうど成人といった具合だが、それからも年に数日は2国に滞在して有用な論文や最新医療機器の発表などをして仲の良さをアピールしている。

有り体に言えば大国に媚びを売っている。

媚びを売って身辺警護に多大な協力をしてもらって、尚も身の危険が存在する為にあまり病院外に出れないのがこの男である。

男からすれば外国のウマ娘も幸福であって欲しい対象であり、到着して間もなく自分でなければ難しい執刀を頼まれるのも苦ではない。

だが出張が嫌だというよりも、外国のウマ娘と仲良くなるのが嫌だという娘達が一定数存在する。

「今年は行かないでほしい」

直球で要求するのはシンボリルドルフ、現在はトレセン学園の生徒会室に2人が向かい合って座っている。

トレセン学園は男が安心して外出できる数少ない場所にして憩いの場でもある、最低でも2週間に1回は学園に健診と称して訪れる。

訪れた矢先に生徒会長に呼び出された直後の発言がコレである、前もって人払いをしてあるのが実に計画的だ。

いつもの事であるが。

「無理だよルナ、俺の安全上それは不可欠だ」
(ミサイルで都市ごと排除されかけた唯一の個人ですし？　あのサイコパス国家め!!)

シンボリルドルフが男と出会ってから5回は言われた毎年の恒例と化した会話。

大国に協力してもらわねば軽く千回は死んでいるだろう、それだけ男の影響力は巨大に過ぎる。

「ではウマ娘と安易に連絡先を交換しないでほしい」

「何故ウマ娘に限定したんだ？　それも否だよ、第一ルナの信念とも違うだろうに……俺の信念も知ってるだろ？」
(なんか浮気疑われてるみたいでソワソワしてきたわ、まぁ経験無いので正確には知らんけど)

「手の届く全ての患者を救いたい。　悩ましいな……では全ての女性の連絡先を見せてもらいたい」

「どうしたルナ？　皇帝らしいといえばらしい発言だが、ライオン時代に退行してないか？　また抱っこを要求するか？」

（ルナちゃん小っちゃくて可愛かったけどなぁ～　気性が荒かったから暴君だったわ、その頃でも脛蹴られたら骨砕けるパワーだったから正直ガクブルしてた）

「子供の時の!!……事はあまり言わないでくれ」

大声を出した後に周囲を確認してから苦言を呈するルドルフ、男は年一ぐらいの間隔で子供時代を引き合いに出すので話し合いは有耶無耶になる。

冷静になれればいいのだが黒歴史に関する事には過剰反応してしまう、正直男も前世で経験した事である。

「声を荒らげたら交渉は終わりだよ、交渉というか要求の突き付けだったが……まあいいか、こんにちは久しぶりだねルナ」

意地悪げに笑った後に改めて挨拶をする。

「……こんにちは先生、元気そうで何よりだ」

悔しげに眉をひそめた後に吐き出すように言うルドルフ、先程の反則紛いを使われなくても男に口で勝てた事が無いので本当に悔しいと表情に出ている。

「ははは、元気だったよ」

（いやぁ～弁舌で勝負しようとする相手に卓袱台返しキメるの気持ちいいわ、ムカつく政治家とかによくやったなぁ……俺大人げねぇわ、ルナちゃんってば下手な大人より大人だから忘れる。　反省せねば）

この男は絶妙にゲスである、権力者相手に長々と話すのが面倒だからと身につけたスキルを年の離れた友人だと思っている相手に使う

事に躊躇が無い程度に。

「……大丈夫そうだね、ルナは身体が強い上に管理が上手い。　来る時にエアグルーヴ君も見たが彼女は自分に厳しいから、ルナが無理しないように見てやってくれ」

　ふと表情を緩めてルドルフの様子を確認してから話し始める、ルドルフも冷めた紅茶を入れ直す為に立ち上がる。

「部下である前に学友だ、無理はさせないさ」

「ならギャグを言うのを控えなさい、彼女は真面目にギャグをスルーしない努力なんてものをするんだから」

「無理な相談だ、もう考えるのが癖になっている」

「癖なら直せばいいものを……彼女のやる気は乱高下を繰り返すのが運命なのか」

　紅茶を用意するルドルフに背中を向けたまま軽口を叩きあう2人、学園に来る度いつも30分程はこうやって話し合う。
　真面目な話もありオヤジギャグの話もありの自由な時間。

（やはり彼が好きなんだな私は……こんな何気ない会話で心が浮つく程に）

　シンボリルドルフはこの時間を大切にしている。　公明正大であろうとする自分が職権乱用をしていると理解していても、この時間だけは削らないと決めている。

では生徒会長としての仕事を始めよう、あと少しだけ彼と話してから。

勝利者（無敗９冠ワールドレコード持ち）

トキノミノルは無敗のレコードブレーカーと呼ばれた３冠ウマ娘であり、早くに海外に渡り海外でも無敗を貫いた最速の王者である。
引退までの生涯戦績は２０戦２０勝１２レコード

シンザンは最強の戦士と呼ばれたウマ娘であり現役時代の殆どを日本で戦い５冠、海外でのレースは主要なレースで無敗で５勝をもぎ取り凱旋帰国後に引退している。
引退までの生涯戦績は２５戦２３勝３レコード

公式なレースではぶつからなかった２人。

「よく言われるよ。　私はトキノミノル先輩に似てる、皇帝シンボリルドルフはシンザン先輩に似てるってさ……まあシンザン先輩はトキノミノル先輩に説教されるまで不真面目な生徒だったらしいから、そこは逆。　２人が出来なかった公式での直接対決、それをやろうと思ってね」

報道関係者のまえで話すのはアグネスタキオン、８冠のインタビューの時の話。

アグネスタキオンの敬愛する先生の教えの一つ、報道関係は上手く使えば役に立つという教訓。

ライバルとの対戦を談合と言われずに果たす手段、結果を出し続ければ勝手に好意的な報道をする等と色々あるが今回は

宣戦布告だ。

「戦おう皇帝、貴女を倒して私は超光速を名乗る事にしよう。　半年の期間で精々錆取りをしてくれ、私達の世代に身体的不調や怪我の言い訳は効かない。　ではインタビューは終わり」

『今ここで返答しよう、皇帝は逃げない。　共に８冠どちらが勝つのか、勝負だ。』

スマホのスピーカーから威厳のある声が響き、ここに８冠同士の決戦が確定する。

後日の生徒会室にて

「私が勝ったなら先生の病院に研究室を作り自由に出入りする許可を頼むよ、説得の手伝いもしてもらおう」

「では私が勝ったなら引退後に発足させる組織の根回しを頼もう、その優秀な頭脳を私と先生の為に使うといい」

真面目なエアグルーヴが逃走する程の覇気を撒き散らす２人は約束をした。

賭けではない、金銭を賭けていないから賭けではないのだ。

勝者と敗者は常に生まれる。

同着など許さないとばかりに脚を折る程の脚力で2バ身の差を着けた最速。

「新薬の臨床試験終わったよ、相変わらず先生の薬は気味が悪いくらい副作用がないね」

「そう作っているからな……抗ガン剤の副作用を0にできたか、一般普及には十分な値段だろう」

「先生の癌克服の偉業になったアレは効果に比例して高いからね、希少なモノを複数使うし当たり前だよ」

「この10年で少しずつ原料の増産はしてもらっているが、まだ安めの新築一戸建て並の値段だ……初期の転移前ならこの新しい抗ガン剤で完治まで持っていけるが」

「金に物を言わせて転売を企んだバ鹿もいたけど医神教が3万人以上の人で豪邸を包囲してたね、アレには笑わせてもらったよ」

「その名前を出さないでくれ……武器を持たず盾だけ持って攻撃せ

ず、攻撃されても反撃せずに言葉と人数の圧力で薬を正式に買い戻して俺に届けてくれたが……是が非でも無血を貫いて従順過ぎて怖い。
一応新品の薬に取り替えて少し増やして送り返したら、さらに規模が拡大して……」

「大丈夫だよ先生、私は先生が一人の人間だと分かっている。私が居るから先生は孤独にならない」

「男に抱きつくな、何度も言うが年頃の娘がはしたないぞ？　お前は小学生ではないんだ」

「照れ隠しかな？　先生はもっと素直になりたまえ」

項垂れた男の低くなった頭を優しく抱きしめる彼女こそ超光速のプリンセス、ワールドレコード保持者にして９冠を戴くウマ娘アグネスタキオン

皇帝を玉座から引きずり降ろした勝利者である

外堀

男に感謝や感謝以上の感情を抱くウマ娘は必然的に怪我や病気になった時に、それを治してもらったウマ娘達が多い。

「せんっせー!!」

「ぐおっ」

(何じゃ何じゃカチコミかぁ!? 何処の国の暗殺部隊じゃあ!!)

男の内心は数百と襲われたプロへの文句であるから仕方無いとして、上背は平均身長だが激務に耐えうる肉体を誇る故に中々重いと言える男を仰け反らせる衝撃。

「テイオー……先生を見る度に飛び付くなと言っているだろう、まったく仕方のない奴だ」

ベリッと男から引き剥がされるのはトウカイテイオー。

2度の骨折を経験するも即座に治った事で無事に無敗の三冠を達成し、現在は魔窟極まるルドルフ達の土俵で戦うウマ娘だ。

ルドルフも男に無邪気に甘える姿を見て微笑ましい感情を隠しきれずに苦笑いを見せる。

「テイオーちゃん久しぶり、元気そうで何より」

(元気っ子って癒されるわぁ、あぁ〜若返る〜)

「ボクはいつも元気だよ、先生のおかげでね!」

ルドルフに猫のように持たれたままで会話をする2人、要するに何時もの事なのだ。

挫折の無い分傲慢になっていた時期もあったがテイオーはバ鹿ではない。男の存在が無ければ3冠はなかったと理解しているし、トレーナーから天性の身体の柔らかさに頼り過ぎた走り方による骨折だと聞かされ、もう一度骨折しながらもフォームの改善をトレーナーと二人三脚で成し遂げた。

何よりルドルフが評価するのはテイオーは男を父親のように慕っている事、テイオーの恋慕はトレーナーに向いているのだ。

絶対に恋敵にならない上にルドルフを慕ってくれている、故にルドルフはテイオーを猫可愛がりしている。

トレーナーとならルドルフに勝てると宣戦布告してきたテイオーにルドルフは覇気を持って返答したが、内心では抱きしめたくて仕方がなかった。

トレーナーと喧嘩したので仲を取り持ってほしいと相談と称して遠回しにお願いしてきた時など普通に抱きしめた程だ。

「挨拶も終わった事だ、先生の定期健診に行こうか。　時間も」

「お兄様！」

ルドルフの笑みが固まる。

癒やされた代償に戦えと言わんばかりの敵の襲来。

「来てたんだ、こんにちはお兄様。　テイオーさんも会長さんも、こん

にちは」

ライスシャワーは3人に挨拶をする。

厳密には男とテイオーに挨拶したついでにルドルフに挨拶をした。

ライスシャワーは明確にルドルフとタキオンを敵対視すると正直に真正面から宣言した事がある。

2人に負けないと宣言したライスシャワーの目には確固たる意思が籠められていて、絶対に引く事は無いと目が語っていた。

ルドルフもタキオンも納得して受けて立つ宣言をした。

2人がライスシャワーから聞いた話を要約すれば男が大人として医師として正しい発言をして、一切の自覚無く誑し込んだのは明白だった。

「こんにちはライス……少しトレーニングのし過ぎだな、休む時は休むんだよ？　今日はトレーニングをせずに休みなさい」

（呼び方おじさんでもいいのよ？　なんだろうな10歳程度の差でおじさんって呼ばれると嫌なのに……20歳違うとお兄様呼びが気遣いから来るように感じるわ、俺の心が汚いからなのかね）

「はい、ごめんなさいお兄様」

「よろしい、トレーナー……は居ないのか。　1度骨折しているからな、流石に心配だ。　後でいつものトレーニングのメニューを送ってくれれば俺が調整しよう、遠慮は無しだ。」

（ライスとかスズカはなぁ……投げ出したりしたら自己嫌悪で死ぬか

もしれねえ）

「ごめ……ありがとうお兄様、ライスはお兄様の考えてくれたメニューなら必ず守れると思う」

「そうか、なら信頼に応えよう。　ル…ルドルフ行こうか、流石に時間が押している」

（なんか人気者になった気分？……人気者だったわ、結構な数のウマ娘治療したし。　美少女に囲まれると無意味にテンション上がるぅ！）

「ああ、同意見だ。　少し急ごう」

テイオーとライスに手を引かれてトレーニング施設を巡り、動きに違和感のある生徒を見つける度に止まりながら次々にウマ娘の診察をしていく男。

男性より女性が痛みに強いようにウマ娘は更に痛みに強い、それは鈍いとも言える程で足の指程度なら疲労骨折をしたまま走れる。

だが走れるだけで痛くない訳ではない上に普通に悪化する。

故に我慢しないで病院に来なさいと指導しているが効果はイマイチである事にため息を吐く、定期的に訪れる男が毎回数名は骨折に耐えているウマ娘を見つけている事に、頑丈さと根性論の相性の良さを痛感する。

トレーナーの居るウマ娘が重傷レベルの怪我をすればトレーナーは減給などの罰が与えられる。

十数年前に男が怪我を即座に完治させる事を利用して無茶なト

レーニングをウマ娘に課すトレーナーが居たから生まれたルールだ。

しかしトレーナーの居ないライスのようなウマ娘達は怪我をしない程度のメニューでは満足しない、彼女達もレースに出たいし勝ちたいのだ。

止めるトレーナーが居ないので無茶をする、無茶をしても治るので再度無茶をする悪循環。

怪我や病気での引退は無くなったが学園内で死亡未遂事故、男が執刀しなければ確実に死んでいた事故が起きてからは流石に彼女らの無茶を規制するしかなかった。

今は学園の合格人数を本来の半分である１０００人に減らしている。

それからはトレーナーも増えて生徒の６割はトレーナー持ちか、トレーナーの率いるチームに所属している。

それでも自身の才能に限界を感じて去っていくウマ娘はいるのだから今が丁度いいのだろう。

アグネスタキオンを代表にサイレンススズカ、他にも馬時代は有名とは言えなかったウマ娘が活躍している。

昔では考えられなかった事だが、Ｇ１レースにスターウマ娘が居なくてもレース場は満員になる。

強いウマ娘を応援するのではなく、好きなウマ娘の活躍を祈り全力で応援するレースファンが増えて来ている。

容姿で雰囲気で走りで表情で、様々な要因から好いたウマ娘が大舞台で勝利し歓喜を爆発させる姿に感極まり大の大人が号泣する姿も散見される。

男は男が居ない世界よりも男が居るこの世界は、圧倒的に努力が実を結ぶ数が多いと胸を張れる。

怪我を推奨など死んでもしないが、努力の末の怪我ならば治す。痛みによるイップス等にも手を尽くし、必ず健常に戻した。

引退するウマ娘達は自身の可能性を出し尽くした結果の引退だと悔しさ九割の中に清々しさを一割抱いて去っていく。

ブラッド・スポーツとまで言われた競馬を受け継いだ世界故に、この世界は残酷なまでに才能至上主義だ。

だから可能性の全てを吐き出せた彼女らは幸運なのだろう。道半ばでの怪我や病気での絶望を抱えた引退では無く、全身全霊を出し切った上の敗北と引退なのだから。

「ウマ娘が満足するまで走れる一助に……当初の目的は達成できたかな？」

（マルゼンスキーがレースに出続けたから一敗したし、スピードの向こう側目指すスズカは3回も複雑骨折するし……マルゼンは優等生だがスズカってばかなりの問題児なんだよなぁ）

「先生の尽力が一助なら私達の尽力など塵芥だよ、謙遜は自身の大きさを考えて発言してほしい。」

男がトレセン学園に多大な寄付と協力をし始めてから怪我病気の

引退は0、精神的な問題も尽く排除されているので自主的な引退が全てだ。

ルドルフが考えるに引退した彼女達は走り切った。青春全てをレースに使い、そして次の道へと進んだだけの事。

ルドルフが男に懸想している事は案外多数にバレているのでレースで負けた意趣返しなのか結婚報告が多数送られてくる、結婚式への招待では無いので煽っているのは確実だ。何度皇帝の神威を見せてやろうとしてエアグルーヴに止められた事か。

つまり引退した者共は健常そのもので、ウマ娘生を存分に謳歌している。そしてその謳歌の大部分に男が関わっており、男が居たからこその彼女らの幸せなのだ。

「俺は健常に戻すだけだ。不屈の闘志を持って立ち上がり走り抜いたのは彼女達、謙虚とは違うな……役割分担と言うのが正しいか」

（ウマ娘の精神パウワってヤベーからな、実際俺は回復と維持、脆い者を普通にしただけだし……主に俺の人生を犠牲にして）

「結婚か」

（もう諦めろよ、って氷の妖精が言ってる気がするが知らん！嫁とイチャコラしたいんじゃぁ！医療関係じゃ各国に引かれる程貢献したじゃん！神だ何だと崇めるなら妃的な女性も側に居て然るべきじゃんよぉ！）

短い一言がルドルフとライスに衝撃を与えた。

この男は端から見れば医療に人生を捧げた求道者である。故に結婚願望があるなど初めて聞いたのだ。

副音声たる内心では事ある毎に愚痴っているが本心が口から漏れ出たのは初である。

即座に男からあくまでも自然に距離を取るルドルフとライス。

「ライスシャワー、貴様は先生の独占を望むか？」

「ライスはお兄さまの１番に唯一になりたい。でも叶わない願いって事も理解してるよ？だってタキオンさんが居る。」

そう、最大の障害はアグネスタキオン。最初期から男の側に侍り、今でも病院に１室を造らせて最も近くにいる。

「互いの目的を明らかにするべきか。私は先生の愛を受け取れるならば１番でも１０番でも構わない。私の信念の手伝いはして貰いたいが、強制はしないし手伝いは名誉職になるので拘束時間は極めて短い。」

「ライスはお兄さまのお嫁さんになれればいいよ、結婚式には憧れるけど我儘を言って困らせたくない。それとタキオンさんに伝えるべきだよね？多分色んな準備を整えてると思う。」

着々と進む男の包囲網に気づかず、男は新しく見つけた怪我をしているウマ娘の治療に集中していた。

「ハッハッハッ既に準備は万端さ、政府も天皇も先生に限り重婚を認めるとさ。だけど序列は大事だよねえ？第２夫人第３夫人？序列を

承認するなら半年で外堀内堀本丸まで埋め、本丸で先生に降伏勧告をしてあげよう。」

「……異論は無い、先生と触れ合う時間は交渉の後に決定しよう。」

「ライスはお兄さまと結婚できるならライスの時間は自分で確保する。お兄さまの自由意思を捻じ曲げる事をタキオンはしないって信じてるから」

こうして男の預かり知らぬ所で計画は順調に進んでいた。

そしてタキオンが態と流した情報により更に2桁の立候補者が現れ、男の拗らせた童貞特有の小学生低学年女児のようなロマンチックな出会いやプラトニックな愛などの妄想は砕かれる事が確定した。